

# 写真で綴る早川孝太郎の生涯

平成19年2月11日

- 待ちに待った早川孝太郎全集第十二巻(雑纂・絵と写真)未來社から、須藤功先生のご尽力により発行された。第一巻が発刊されてから、36年目になる。絵と写真のページは350、そこに約700枚の写真を入れたい。もろんこれは選定されたもので、実数はその3倍は残っていた。……須藤先生の便りに書かれていた。全集の662ページには、—早川が残した写真は約2000枚、そのうち約1500枚が早川の撮影になるもので、ほかは高橋文太郎、桜田勝徳らが写したものと、写真屋の撮った記念写真である。—と書かれている。よくぞ保存されていたと驚くものである。
- 早川孝太郎著の『花祭』は、昭和のはじめであり、もうそのころにはカメラが使われていた。フラッシュなどないので、明るい時はカメラで、暗い場面は筆でスケッチ、文章で取材をしたと思われる。ここにも淡沢敬三氏の援助があったことだろう。
- 今までに手元にあった資料や、全集十二巻の中の写真や解説をお借りして、早川孝太郎の生涯をまとめてみることにした。空白の時代はあるが、なんとか繋ぐことができた。年譜にあわせて見ると、孝太郎の姿が甦ってくる。
- これを機会に、早川孝太郎ファンが増えると本望である。
- ◎ おこわり まとめる期間が長すぎたことで、文体も教柄もまちまちになったことお詫する。写真や説明文など無断でコピーさせてもらった。営利目的ではないのでお詫しを願いたい。(出典はそれぞれに記してはある)

大著『花祭』の発刊された年に生まれ、今年喜寿の男 山本好美 大野在佳

明治35年 高等科4年卒業 (13歳)



明治35年、長嶽尋常高等小学校高等科4年卒業記念  
(丸山彰氏より提供資料)



中央が早川孝太郎氏  
(丸山彰氏より提供資料)



大正12年7月、大野銀行豊橋支店で取付対策として  
札束を山と積んだ光景 (東海銀行史)

明治36年~41年 (14歳~)

大野銀行 豊橋支店 勤務

姉婿の世話で豊橋支店に住み込み。  
左の写真のころには、<sup>(19歳)</sup> 東京に出ていた。

参考 大野銀行について

昭和三十八年八月大野町下山子平以外十五名は、南北  
設楽八名の三郡に銀行なく、金融を困らしていた  
実情を憂いて、山林を融る主目的として、明治29年  
2月25日 資本金5万円にて株式会社大野銀行  
を設立した。  
豊橋支店は明治32年5月に開業した。

柳田国男



日本民俗学の父柳田国男

(日本民俗文化大系①)  
柳田国男 講談社

出会い



『郷土研究』  
柳田国男の手により  
大正2年に創刊

大正4年3月 (21歳)

『郷土研究』第2巻12号に「三州長篠より」を投  
稿。以後次々に寄稿し、柳田国男先生に認められる。

(31歳) 大正9年2月 灯刃叢書 文芸社  
『おとら狐の話』柳田国男 共著  
早川孝太郎  
140P 40銭

(32歳) 大正10年12月 灯刃叢書 郷土研究社  
『三州横山話』早川孝太郎著  
119P 70銭

(36歳) 大正14年10月 灯刃叢書 郷土研究社  
『羽後飛鳥図誌』早川孝太郎著  
1冊

(37歳) 大正15年10月 郷土研究社  
『猪・鹿・狸』早川孝太郎著  
229P  
(本の写真 山本撮影)

# 早川孝太郎を支えてくれた三人の師

澁澤敬三



澁澤敬三

大実業家 渋沢栄一の子  
(日本民俗文化大系 ③ 講談社)

東大経済学部卒業  
横浜正金銀行へ入行  
第一銀行、東京貯蓄渋沢倉庫  
各取締役 子爵襲名

○大正15年初頭 柳田先生の御紹介で 早川孝太郎と出会う。

このころから定職を得る昭和11年まで  
早川はさまざまの支援を渋沢から受ける。  
全集12 徳澤社

## 擁護者

花祭の語を聞くに連れ、その規模基礎の容易なるゆゑに、当時これが『浮城物語』の冊として世に問うは、あつたのを、変更して、同様に、徹底目的に、調査するように、あつた。同様に、徹底目的に、調査するように、あつた。同様に、徹底目的に、調査するように、あつた。

柳田國男



早川筆の柳田國男素描。  
昭和13年(1938)4月。

(早川孝太郎全集 第12巻 耕社)

明治33年東京帝国大学法科大学  
政治科卒業  
農商務省農務局に勤務  
朝日新聞論説委員  
○学問の父、日本民間伝承学  
の祖 (民俗学の草創)

恩師 東京牛込区賀町在住  
の学者に見込まれ、その書以  
録の前にすわらされて、田舎か  
ら招せられた政老よろしく、郷  
里の古物語を幾日も読みもか  
けて、とつとつと話すうちに、そ  
のうち気がついたのである。一  
人の研究者にまつたということ  
この聞き上手、語りせよといふは  
もちろん柳田國男である。(全集12)

折口信夫

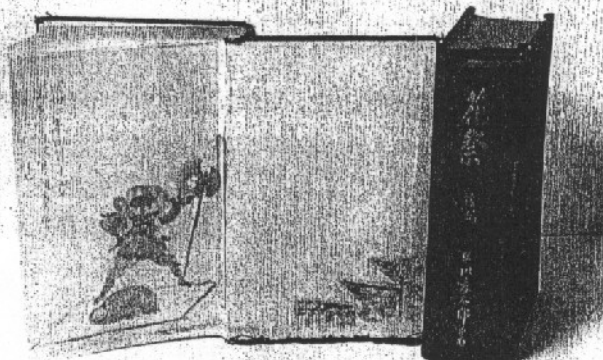


折口信夫近影(撮影筆者)

(日本民俗文化大系 ② 講談社)

国学院大学国文科卒業  
大正2年『即工研究』へ投稿  
柳田國男の知遇を得る。

○柳田先生の門弟のひとり。  
○早川孝太郎のよき学問の  
アドバイザー(助言者)である。  
○早川は折口としばしば旅行で共  
にいた。折口は早川のことを「あ  
らさん」と愛称、「あいらん」も  
いう。

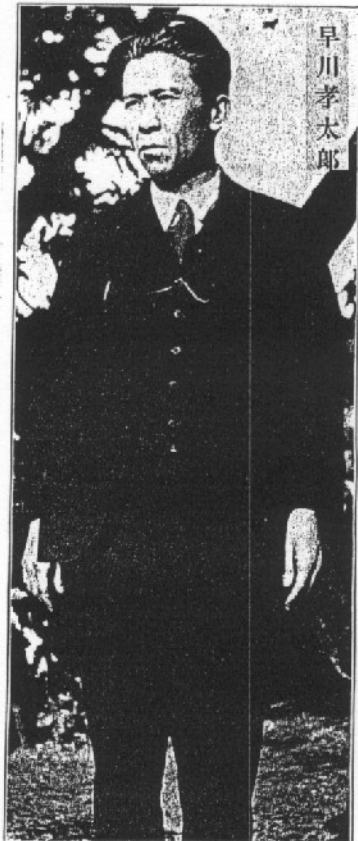


早川孝太郎の名を不朽のものにした、前後編合わせて1744頁の『花祭』。昭和5年4月5日、同書院より刊行。限定300部。すべてに番号が付され、第1冊は柳田國男、第2冊は折口信夫、第3冊は澁澤敬三に連星。第10冊を早川のものとし、その前編の表紙見返しに、「昭和五年四月十九日 閑麗宮内次官の執筆に依り 關 天寛」と記した。

(全集12 耕社)

澁澤敬三 昭和17年 日銀副総裁  
"19" "総裁  
"20" 大蔵大臣

300部の代金は  
澁澤敬三氏が全  
部出した...と云われている。



早川孝太郎

(早川孝太郎全集(未来社)内容見本に掲載写真)

昭和5年ころと思われる。  
澁澤栄一のアメリカみやげのオルケシの像中略什  
のくさり、オーターマンの年輪が胸に映っている。